

概要報告

実施期日	7月28日(火)【午後】
部会名	小学校 国語部会

テーマ 『書く力を育てる授業の工夫～『すごろくシート』を活用して楽しく書く～』

提案概要

日頃から書く活動を積極的に取り入れてきた。書くことでは目的意識や相手意識を大切にしている。書き表したも
のには読む相手が存在し、表現の仕方ひとつで相手への伝わる内容や伝わり方が左右されるからだ。書く活動を通し
て、書けたという達成感と伝わった喜びから、書くことの楽しさ、意欲へとつなげていきたいと考えている。

今回は第2学年で書く力を高めることに主眼を置いて、児童への意識付けやワークシートなど「おもちゃの説明
書」を書く活動に意欲的に取り組める以下のような工夫を取り入れて単元を構成した。

- 目的意識（おもちゃづくりの説明書を書いて、作り方を教えよう）と相手意識（クラスの友達に）をもたせる
ことで、よりよく書けることをねらった。
- 教材文「しかけカードの作り方」「おもちゃの作り方」で読み取った言葉（順序や数、大きさなど）を、説明
するときにわかりやすくなる言葉としてワークシート「せつめいのこつ」にまとめた。
- おもちゃ作りの手順を整理するために、付箋型のワークシート「すごろくシート」を書かせた。「作業」と
「工夫」の色を変えた短冊を1セットとして、模造紙に短冊を貼っていくことで、おもちゃ作りのスタートか
らゴールまでをすごろくに見立てて、その過程を表せるようにした。
- はじめに全体で、一つのおもちゃについて「すごろくシート」を書き、付箋の順序も変えてみせることで、
「すごろくシート」の書き方、使い方を共有した。
- グループで「すごろくシート」を作成することで、文章を構成することや書くことが苦手な児童も互いに支え
合えるようにした。説明書は、「すごろくシート」をもとに一人ひとりが書いた。
- 説明書を書くにあたり、実際に児童がおもちゃを作り、それを目の前に置いて書くようにした。
- 書き上げた説明書は、互いに読み合わせて、良いところ、わかりにくいところを伝え合った。良いところを伝
えることで達成感や自信に、わかりにくいところを伝えることで推敲につなげた。

《成果と課題》

- ・目的意識をしっかりとをもって書いたことが、意欲的な活動につながった。相手意識はもつことはできたが、対
象をクラスの範囲を越えて広げれば、書き方が更に変わったかもしれない。
- ・「すごろくシート」は、文章を書くことを苦手としている児童にとっては、非常に有効な手段であった。
- ・個々に書く力をつけてほしいと考えたため、説明書は個人で書かせたが、一人ひとりへの指導が難しかった。
- ・おもちゃ作りの作業を写真に撮り、説明書の文章を補完する図として活用できたら良かった。
- ・説明書の読み合いをさせたいが、間違いに気付き推敲するということに課題が残った。

質疑概要

- ・グループ活動におけるルールはあったのか。
→短冊を書く順番を分担した。書く内容をみんなで検討させたので、苦手な児童も書けた。
- ・説明書を個人作業で書いたが、個人差はどの程度みられたのか。
→やはり個人差はある。「すごろくシート」がしっかりできれば苦手な児童も書ける。そこへの丁寧な指導
が必要だった。
- ・「せつめいのこつ」をどのように作ったのか。
→教材文で順序を表す言葉などを見つけていき、教材文以外で重要と思われる言葉は色を変えて加えた。
- ・「すごろくシート」は以前から使用しているものか。また、他の学習でも活用したのか。
→「すごろくシート」のような付箋型は初めて取り組んだ。これまでは、接続詞や文章構成を意識すること
を積み重ねてきた。その後の学習では、付箋型は取り入れなかったもので、活用すればよかった。
- ・楽しさや達成感を味わって、作文などの質は高まったのか。
→学級で日記を書く活動をしていたが、苦手だった児童も伝えようとする意欲がみられるようになった。

研究協議概要

【協議の柱】「書くこと」の喜びと達成感を味わえる指導の工夫について

《提案についてのグループ協議から》

- ・「せつめいのこつ」があることで、児童は言葉を選びやすい。高学年でも活用できる。
- ・「すごろくシート」は、短い文を重ねていくやり方なので、文章にできる児童が多くなったのではないか。
- ・「すごろくシート」は戻って作業できる良さがあり、工夫と手順が色分けされているのもよい。付箋を使つての個人で作業するなど今後にも活用できる。
- ・文章を書くためのメモも児童にとっては難しいものである。「すごろくシート」は、よい体験となった。
- ・教え合いの中で書けるようになっていった「すごろくシート」の手立てがとてもよかった。最後まで書けたという達成感を味わうことができた。
- ・この単元(教材)では、文章では表しきれないことを絵で表す必要があり、文を書くこととは違った能力が求められるため、難しさのひとつになっている。
- ・書くことを楽しむことと、文章の質・書く力を高めることの折り合いをどのようにつけていくのが難しい。
- ・「なぜ書くことが大事なのか」と書くことを価値づけることで、意欲も高まるのではないか。
- ・書くことが苦手な児童は、上手な児童の作品(説明書)をまねることも良い。
- ・写真はあえて活用しなくてよい。無いことで、言葉でどのように説明をするのかを思考する機会となる。

《協議の柱についてのグループ協議から》

○継続から達成感へ

- ・今週のニュースや交換日記、作文の視写、書くことに慣れることが大切である。低学年から日記などで楽しく文づくりをする体験を積むと良い。書く活動の継続で書ききれようになり、達成感や楽しさにつながる。
- ・日常の出来事を書く実践では、考える時間の確保や文章のサイズを使い分ける等の工夫をして継続した。
- ・一年間、書いたものをためておいて、個人内での成長を確認することで達成感を味わうこともできる。

○意欲を持たせる工夫、丁寧な指導

- ・「好きなことを書いてみよう」など、書かされている感から、わくわく感を。書く目的・相手意識を大切に。
- ・書いてよかったということ(誰かに見てもらえる、褒められる、残る、反応をもらえる等)の積み重ねが、次への意欲につながる。
- ・文章は、一生懸命に努力した子どもたちの成果。否定せずに意図をくみ取り、修正すべきところは提案型の言葉がけをすることが書くことの楽しさにつながる。
- ・個人的な聞き取りとともに、グループで支え合わせる。
- ・書くポイントを絞り、書き始めに材料集めの手立てをとる。
- ・順序を表す言葉の活用など具体的な指導の後、できたものは褒めるという繰り返しが達成感につながる。
- ・即時的な対応をする。実物投影機を活用して文章を映し出して良い点、修正点などを共有する。

まとめ概要

- ・目的意識と相手意識を明確にすることで、単元を通して意欲的に学習に取り組むことに繋がった。
- ・「すごろくシート」は、手順の過程を視覚化できて児童がイメージしやすい。付箋のように扱えることで、手順の修正がいつでもできるというメリットがあった。
- ・読み手がどんなメッセージを受け取ったのか、児童同士の伝え合う活動を大切にしたい。書き手への感想を書くなど交流の場を設定することで、喜びや達成感、書くことへの励みや自信を得ることができる。
- ・書くことの指導時間が低学年から高学年へと大きく減少しているなかで、書く指導事項を精選し、学校全体として国語科の書くことの領域で低中高の繋がりを見通した指導の体系を作っていきたい。
- ・はじめから一人で書くよりもグループで話し合いながら活動することで、児童はヒントを得られる。
- ・モデルを示すことも大切だが、そのモデルを使うと何が良いのか。それを繰り返し伝えることが大切。真似をさせるだけにとどまらず、子どもたちが納得できるようにすることが活用につながる。